様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６７１７

研究課題名（和文）古代ローマにおける文学・神話・社会をめぐる研究基盤の確立

研究課題名（英文）Rethinking about Basic Concept of Literature, Mythology, and Society in Ancient Rome

研究代表者
河島　思朗（Kawashima, Shiro）

東海大学・文学部・講師

研究者番号：８０７３４８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究はラテン文学作品（古代ローマの文学）を代表するオウィディウス『変身物語』を考察の対象とし、(A)作品がいかなる性質の叙事詩であるか、(B) 当時の時代背景のなかで詩人はなぜこの叙事詩を提示したか、を解明するとともに、(C) 神話（あるいは物語）の社会的意義は何か、を明らかにすることを目的とした。そして、作品を当時の社会的文脈のなかで再解釈することで、古代ローマにおける文学・神話・社会を不可分のものとしてとらえる観点を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：This research focused on Ovid's Metamorphoses which is a representative work of Latin literature and aimed at revealing three points; (A) what kind of epic is Metamorphoses, (B) Why did the poet create such epic in historical background, (3) what is the social meaning of mythology (or mythos) . I analyzed and reinterpreted Metamorphoses in the context of Roman society and offered the concept that literature, mythology, and society were inseparably elements in ancient Rome.

研究分野：西洋古典学

キーワード：西洋古典学　ラテン文学　オウィディウス　変身物語　古代ローマ　神話　物語

１．研究開始当初の背景

オウィディウス（前 43 年－後 17 年頃）の『変身物語』は、全 15 巻、約 12000 行のなかに、およそ 250 編の大小様々な物語（神話）が、叙事詩の韻律で語られている。この叙事詩は、ひとりの人物や大きな出来事を描き出すような、ホメロスからウェルギリウスに至る伝統的な叙事詩とは異なる。そのために、『変身物語』がいかなる性質の叙事詩であるのか、研究者によって活発な議論が為されてきた。

とりわけ議論は、『変身物語』が叙事詩にふさわしい統一性を有するか否かを中心とする。作品の序歌の役割を果たす第１巻冒頭部分において、詩人は「途絶えることのない歌」を歌うという宣言に基づき、叙事詩にふさわしい統一性の存在を訴える。しかし、約 250 編という物語の多様性を理由に、叙事詩の統一性を否定する見解も多い。申請者はこれまで『変身物語』が叙事詩として統一性を備えていることを主張し、その検証に力を注いできた。

一方で、申請者がおこなったウェルギリウス『牧歌』の研究によって、詩人が当時の時代背景を考慮しながら、指導者層からも民衆からも独立した立場で、新たな時代へと社会を導く重要な観点を、作品を通して提示していることを解明した。ラテン文学作品とりわけ叙事詩は、古代ローマにおいて社会を先導するような重要な位置づけにあり、作品を創る詩人は予言詩人（ウァーテース）と特別に呼ばれ、自他共に認める社会的役割を担っていた。しかし、文学と社会の関連についての研究は一部にとどまっているのが現状である。

予言詩人と呼ばれていたウェルギリウスと同様に、オウィディウスもまた予言詩人として活躍した詩人であるために、社会的な観点を有していたと考えられる。予言詩人が社会の行く末を見極めようとした存在であるならば、『変身物語』と社会の関連を明らかにする必要がある。また、『牧歌』がそうであったように、社会背景を考慮せずに作品の理解はできない。このような背景のもと、本研究はオウィディウス『変身物語』を研究の中心的対象としながら、古代ローマにおける文学・神話・社会をめぐる新たな視座を提示しようとはじめられたものである。

２．研究の目的

本研究は特にラテン文学作品を代表するオウィディウス『変身物語』を考察の対象とし、以下の 3 点を明らかにすることを目的とする。

(1)『変身物語』に含まれる物語相互の連関を具体的に考察し、作品を物語群の集大成であると解したうえで、作品全体の統一性を明らかにする。

(2) 作品当時の社会（ローマの平和と呼ばれる時代）における神話および宗教のあり方について包括的に理解するとともに、特にアウグストゥスがおこなった宗教改革（伝統的神話と宗教の復興政策）に焦点をあて、諸物の神話的縁起譚を語る『変身物語』との関連を明らかにする。

(3) 『変身物語』が神話を題材とし、神話を想像する叙事詩であることを前提に、古代ローマにおける文学・神話・社会のあり方を不可分のものとして捉える観点を提示する。

３．研究の方法

本研究は研究推進に必要な計画と方法について、以下のふたつの観点を中心とする。

(1) 作品の詩的構造分析：「世界の起源から現代まで歴史的経過に沿って語る」ことを企図した『変身物語』を、作品構成にしたがって 3 つに区分（第 1 部「太古」、第 2 部「神話時代」、第 3 部「歴史時代」）し、各部に含まれる物語および物語群が描き出す意義を詳細に分析することで、作品全体の統一性を解明する。また、統一性を生み出すために異なる物語を有機的に連関させている詩的技法を明示する。

(2) 社会的文脈における神話分析：神話を編んだ物語群である『変身物語』が当時の時代背景の中でどのような意味を持ちうるのか、また神話が社会でいかなる働きを持っていたかを知るために、アウグストゥスがおこなった宗教改革に焦点を当てて分析する。具体的には、予備調査として歴史文献資料、考古学資料、図像資料の分析を通して、復興の対象となる神話の性質を明示する。また、その調査における成果と『変身物語』および他の文学作品との比較検討をおこなうことで、一定の見解を提示することを目指す。

４．研究成果

上述のような研究目的と計画・方法のもと、大きく分けて 4 つの成果および今後の発展につながる研究の視座を得ることができた。

(1) 本研究の中心をなすオウィディウス『変身物語』に関して、詳細な読解作業をつうじて、統一性を生み出す詩的技法の基本理念を解明することができた。具体的には、作品の性質を提示する序歌と呼ばれる部分に着目し、考察することによって、詩人が企図した新たな叙事詩の性質と、統一性を作り上げる原理を明示した。そのうえで、第 10 巻を取り上げ、具体的な検証をおこなうことで、実際にどのような形で統一性が維持され、効果を有するかを明らかにした。本研究の成果に

よって、従来考えられていた以上に、物語群の結びつきが強く、物語相互に影響関係を有していることを解明した。その成果を受けて、作品全体を貫く統一性について、新たな理解を提示することができた。

(2) ローマの神話的・宗教的・文学的な独自性と継続性を明らかにするために、古代ギリシアからローマ帝政期、すなわちホメロスからオウィディウスにいたるまでの、相互の影響関係を考察した。古代ギリシアからローマにいたる文学的伝統の分析は、伝統を引き継ぎながらも新たな形式を構築しようとする『変身物語』の革新性を明らかにするに至った。また、ホメロスの『イーリアス』におけるアエネーアース神話の分析をとおして、『イーリアス』以前の伝統からウェルギリウスの『アエネーイス』にいたる神話の継承と変革を明らかにした。
　また、イタリアへの実地調査およびローマ研究者たちとの交流のなかで、神話を社会的文脈でとらえるための道筋を見いだした。さらにその研究過程では、古代ローマにおけるエトルリアの影響の強さを確認するに至った。ローマ研究においては、一般的にギリシアとの結びつきが強調される。しかしアウグストゥスの宗教改革などの現実的な政策の上でも、リウィウスの『ローマ建国以来の歴史』にみられる歴史的・神話的観点においてもエトルリアは無視できない。オウィディウスの『変身物語』においてもエトルリアの影響が散見される。この点については、本研究が当初予想していなかった成果であり、今後の課題ともなる。

(3) ローマ社会における神話の役割を分析し、ウェルギリウスの『アエネーイス』およびオウィディウスの『恋の歌』、『祭暦』、『変身物語』を中心に、一定の理解を提示することができた。従来の研究が指摘するように、ローマ建国の叙事詩である『アエネーイス』はローマの歴史的背景を強く意識し、社会的に重要な役割を持つ。本研究においては、とりわけ神話の語りとしての側面に着目し、新たな理解を提示した。また、先行研究においては、あまり指摘されることのないオウィディウスの作品においても、社会的な意識や観点が物語理解に欠かせないことを見いだした。古代の文学作品は神話を題材としているが、その神話の語りは文学的意図のみならず、社会的な文脈によっても理解される必要があることを明らかにした。このような観点は、ラテン文学解釈に新たな視座を与えるものであり、今後の研究を大きく変える成果と判断できる。

(4) 本研究は以上のような研究成果をもとに、「古代ローマにおける文学・神話・社会のあり方を不可分のものとして捉える観点」について一定の理解を提示することができた。このような観点は古代ローマ研究およびラテン文学研究に大きく発展の余地を与えるものとなったであろう。ただし、本研究は、『変身物語』を中心とする一部の事例を提示することで、研究手法の基礎を築くものである。各詩人のさまざまな作品についても、詳細な読解作業と社会的視点という大きな視野からの考察を今後さらに推し進める必要がある。このような発展の道筋を見いだすことができたことが、本研究の重要な成果と言いうるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

(1) 河島思朗、「ギリシア語の方言とラテン語の標準語――共通語・公用語に関する文学の役割――」、『日本語学』479（2018）pp.66-80．査読無

(2) 河島思朗、「オウィディウス『変身物語』における叙事詩と非叙事詩の混交 ――序歌、オルペウスの物語、アラクネーの織物――」、『地中海学研究』40（2017）pp.5-25．査読有

(3) 河島思朗、「書評：Aaron M Seider, *Memory in Vergil's Aeneid. Creating the Past.* Cambridge UP 2013」、『西洋古典学研究』64（2016）pp.140-142．査読無

〔学会発表〕（計８件）

(1) 河島思朗、「古代ローマ社会における文学と神話があらわにするもの」、シンポジウム「「危機」のあらわれ」、2017 年 7 月 25 日、東海大学（神奈川県・平塚市）

(2) 河島思朗、「西洋古典文学の場合：オウィディウス『恋の歌』の解釈」、シンポジウム「ヨーロッパの「語り方」：研究の視点と手法」、2017 年 1 月 21 日、東海大学（神奈川県・平塚市）

(3) 河島思朗、「ラテン文学研究と物語の読解 ―アラクネーの神話（『変身物語』第 6 巻）をめぐって―」、名古屋大学西洋古典研究会、2016 年 12 月 10 日、名古屋大学（愛知県・名古屋市）

(4) 河島思朗、「古代ローマの食文化～人間と神々と恋の歌～」、シンポジウム「ヨーロッパの食」、2016 年 7 月 23 日、東海大学（神奈川県・平塚市）

(5) 河島思朗、「ローマ人が創り出す「ローマ」：ウェルギリウス『アエネーイス』が描

くローマの起源」、シンポジウム「捏造されたローマ：その解釈の変遷」、2016 年 1 月 22 日、東海大学（神奈川県・平塚市）

(6) 河島思朗、「神話の語りと叙事詩の性質――オウィディウス『変身物語』における統一性をめぐる考察」、地中海学会研究会、2015 年 12 月 19 日、東京大学（東京都・文京区）

(7) 河島思朗、「古代ギリシア・ローマの家畜・犠牲獣・猟犬 ～動物とともに生きる人々～」、シンポジウム「ヨーロッパと動物」、2015 年 7 月 18 日、東海大学（神奈川県・平塚市）

〔図書〕（計４件）

(1) 植朗子（編著）、河島思朗他（共著）、創元社、『はじまりが見える世界の神話』、2018 年、pp. 54-59.

(2) 河島思朗、ナツメ社、『基本から学ぶラテン語』、2016、304

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者
河島　思朗（KAWASHIMA, Shiro）
東海大学・文学部・講師
研究者番号：80734805

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし